

Movie Review 81 #父親たちの星条旗/硫黄島からの手紙

『#父親たちの星条旗 (Flags of Our Fathers) /硫黄島からの手紙』(クリント・イーストウッド監督、2006年)をNHK BSとamazon prime videoで視聴した。前者は同名のノンフィクション小説を元にした映画化である。硫黄島の闘いを日米双方の視点から描いた「硫黄島プロジェクト」。第一作は、死闘と戦場(摺鉢山の山頂)に星条旗を打ち立てる有名な写真の被写体となった兵士たちのその後などが描かれる。第二作は、『「玉砕総指揮官」の絵手紙』(吉田津由子編)に基づいて日本兵の視点で描いた。姉妹作品であり、2つの映画は背中合わせで撮影され、日本と米国で連続公開された。

葬儀屋を営む老人Bが長い人生が終わりの時を迎える。Bは1945年に硫黄島で戦い、帰国後は葬儀屋を営み、地域に貢献した。ある日、年老いたBは突然倒れて、諱言を口にする。そんな父を見て、息子JBは父を知るために戦友たちを訪ね始め、年老いた元大尉から話を聞く。

ハワイで訓練を受けた後、Bの所属する海兵連隊は硫黄島に侵攻するために出航。三日間にわたり既に砲爆撃を加えていた。翌日、2月19日、硫黄島への米国海軍の砲撃が始まる。海兵隊が前進すると塹壕で待ち伏せていた日本軍が発砲を始め、海軍の船にも重砲弾を浴びせる。戦場では米軍にも多大な犠牲者がいる中、Bは衛生兵として仲間の救助に当たる。やがて海岸堡は確保されたものの、米兵の死体で埋め尽くされる。

2日後、米海軍海兵隊は日本軍からの銃砲撃が降り注ぐ中を摺鉢山へ前進する。2月23日、小隊が摺鉢山の頂上に到着し米国旗を掲げ、海岸や艦船から喝采を受ける。海辺に上陸するときに米国旗が上がるのを目撃した海軍長官が、「あの旗を欲しい」と要求。立てた国旗の所属で揉めたため旗の交代を指示し、従軍カメラマン含め海兵隊員6名が、2番目の米国旗を掲げる場面が撮影された(1番目と2番目の国旗に関わった人物は異なっていた)。3月1日、小隊は塹壕で待ち伏せをしていた日本軍から機関銃による攻撃を受け、仲間の多くが戦死する。戦闘が終了し、写真が新聞の一面を飾ると、米国民の士気は爆発的に盛り上がり、第二次世界大戦を代表する有名な写真となる。国旗は一度交換され、その2枚目を掲げた時に撮られた写真が報道されたため、写真に写された3人は資金集めのスピーチをするために国策として国中を回り、英雄扱いを受ける。3人はそのうち国策に疑問を持ち、葛藤を抱えるようになる(アルコール依存症、PTSD等)。

戦争が終わり、生き残った3人は故郷に戻り生活を始めるが、幸せな人生は送らなかつた。1994年、Bは死の床でうなされ続け、息子に良い父親ではなかつた

と謝り、英雄とは必要に応じて作り上げられた者であることを語る。

2006年、戦跡の日本調査隊が、地下壕の地中に埋められていた鞆から数百通もの手紙（61年前、この島で戦った兵士たちの家族宛て）を発見した。

1944年6月、小笠原方面最高指揮官K陸軍中将が硫黄島に降り立った。本土防衛の最後の砦とも言うべき硫黄島の命運は、K率いる小笠原兵团に託されていた。着任早々、水際防衛作戦を否定し、内地持久戦による徹底抗戦に変更、また部下に対する理不尽な体罰を戒めた。食料も水も満足にない過酷な状況で掘り進められる地下陣地で、米軍を迎撃つ秘策だった。

1945年2月19日、事前の激しい砲爆撃を経て、ついに米軍が上陸を開始する。摺鉢山の頂上にも星条旗が掲げられた（第一作参照）。現地指揮官は持久戦を命じるKからの連絡を無視し、自決命令を下された部下たちは次々と自決を遂げる。しかし一部兵士Sたちは自決せず、Kの意図に従って北部の部隊に合流しようとする。

戦局が悪化する中、一部の将校が独断で反撃を行おうとする。前線に情報が行き渡らずに約1000名の将兵が戦死する。そんな中大本営から「友軍は硫黄島には送れない」と無線が届く（事実上の玉砕命令）。

兵士が米軍への投稿を決意し、地下陣地から出て投降に成功するが、見張りの米兵が後送の手間を省くため、捕虜を無抵抗のまま銃殺してしまう。そして将校Nも負傷して視力を失い、部下たちを先へ進ませるとひとり自決する。兵士Sは死を覚悟して妻に手紙を書く。

遂にKは自ら兵を率いて最後の総攻撃を敢行する。被弾して倒れたKは、かつて米国駐在中に贈られた拳銃を使って自決を遂げる。Kの遺体を埋葬したSは米兵たちに見付かり、捕まって生還する。

再び現代、調査隊がSによって埋められた手紙を発見するシーンに戻り、終幕となる。

イーストウッドは、同じ戦いを米国側と日本側の両方から描くことで、戦争の多面的な真実を示そうとしたのだろう。

①「歴史は視点によって変わる」というテーマ

・「歴史も映画も視点の問題である」という視点の差を映画的に提示した。

②『父親たちの星条旗』：英雄神話の解体

米国側の作品は、「英雄とは何か」を問い合わせる映画となっている。写真に写った兵士たちが「国のための広告塔」として利用され、個人の苦悩が消費されていく構造を提示した。

③『硫黄島からの手紙』：敵の人間性を描く

日本側の作品は、「敵を理解しようとする姿勢」が米国でも日本でも高く評価された。イーストウッドは日本軍を英雄化も悪魔化もせず、「家族に手紙を書く普通の人間」として描いた。

2. 二部作としての意義：イーストウッドが成し遂げたこと

①「敵味方」ではなく「人間」を描く

- ・二部作は、戦争映画の常識である「善悪二元論」を拒否し、「どちらの側にも家族がいて、恐怖があり、倫理的葛藤がある」という普遍的な視点を提示した。

②プロパガンダと記憶の政治学

- ・『父親たちの星条旗』は、戦争の「語られ方」そのものを批判し、『硫黄島からの手紙』は、語られなかつた側の声を掘り起した。

③映画史的にも特異な試み

- ・同じ監督が、同じ戦いを、敵味方の両側から、ほぼ同時期に映画化した。これは映画史上ほとんど例がなく、学術的にも研究対象となっているそうだ。

評価：★★★★★